The Japan Lung Cancer Society



## C-45 肺癌における骨髄移転の検討

岡山大学第2内科[1]，岡山赤十字病院[2]
○宮武和代[1]，大熨泰亮[1]，中田康則[1]，上岡　博[1]，木浦勝行[1]，柴山卓夫[1]，木村郁郎[1]，平木俊吉[2]

目的：肺癌における骨髄転移の意義を検討する。
対象：1976年より1991年までの16年間に当科で取り扱い、骨髄穿刺、骨髄生検などにより骨髄転移の検討が行われた肺癌511例を対象とした。男性404例、女性107例、年齢は24歳から89歳(中央値63歳)、組織型は肺小細胞癌(SCLC)173例、肺非小細胞癌(NSCLC)338例(腺癌198例、扁平上皮癌110例、大細胞癌30例)であった。
結果：診断時、骨髄転移はSCLCでは24例(13.9%)、NSCLCでは15例(4.4%)に認められ、M1症例に限ると、SCLCでは30.3%、NSCLCでは4.4%を占めていた。骨髄転移を有する症例の骨髄検査の陽性率は、塗沫標本の細胞診ではSCLC24例中15例(62.5%)、NSCLC13例中4例(30.7%)、穿刺液のclot section ではSCLC16例中11例(68.8%)、NSCLC8例中5例(62.5%)、生検ではSCLC23例中18例(78.3%)NSCLC15例中11例(73.3%)であった。末梢血中にleucoerythroblastosisを認めたのはSCLCの1例のみであり、骨髄転移例では血清ALP,LDHの上昇例が高率に認められた。他臓器の転移との関連ではSCLC24例中14例(58.3%)、NSCLC15例中13例(86.7%)と高率に骨転移の合併が認められた。
結語：骨髄転移はSCLCに高率に認められ、骨髄生検での陽性率が高かった。骨転移との合併が高率に認められたが、骨転移の有無に関らず、骨髄転移の検索は必須と考えられる。予後因子としての意義についても報告する。

## C-46 肺癌脳転移症例の予後因子の検討

神奈川県立がんセンター内科第3科
○松村正典、山田耕三、野村郁男、住本秀敏、野田和正

【目的】肺癌脳転移症例の予後にかかわる要因についてretrospectiveに解析し，今後の方針を考察する一助とする。
【対象】1985-91年の間に当院に入院し、生存中に脳転移を確認し得た肺癌患者89例を検討対象とした。内訳は男61例・女28例、平均年齢62.8才、組織型は非小細胞癌[NSCLC]68例(腺癌54例・扁平上皮癌11例・その他3例)、小細胞癌[SCLC]21例であった。初診時脳転移例はNSCLCで30例、SCLCで8例であり、脳転移後発例はNSCLCで38例、SCLCで13例であった。
【結果と考察】脳転移治療後の中間生存期間はNSCLC 210日、SCLC 133日であった。単因子解析では、NSCLCでPS、血清ｱﾙﾌﾞﾐﾝ、LDH、AI-P、CEA、肺原発巣切除、化学療法効果が有意であり、また開頭術施行も有意であった。脳転移の出現時期、症状の有無・種類、転移個数の違いで差はなかった。一方SCLCではPS、化学療法効果でのみ有意であり、脳転移出現時期、症状、転移個数の違いで差はなく、また開頭術施行例は少なかった。このうち脳転移後発例についてみると、NSCLCでは化学療法効果、脳転移出現までの期間に関係はなかったが、SCLCでは化学療法奏効例で脳転移出現までの期間は長かった．以上より予後に関わる因子について多変量解析で検討する予定である．

## C-47 肺癌リンパ節転移と関連のある臨床的因子の検討

新潟県立がんセンター新潟病院胸部外科
○滝沢恒世，寺島雅範，小池輝明

目的：画像診断のみでは肺癌リンパ節転移の術前診断には限界がある。肺癌リンパ節転移と関連のある臨床的因子を検討した。
対象と方法：平成1年以後の肺癌切除 280 例を対象とした。小細胞癌，術前化学療法施行，肺門部早期癌，同時性重複癌，不完全郭清の症例は除外した。①最大腫瘍径，②胸膜浸潤，③リンパ管侵襲，④ＣＥＡとリンパ節転移の関連を検討した。
結果：①最大腫瘍径の増大とともにリンパ節転移陽性率は上昇したが，最大腫瘍径 1.5 cm未満の13例はすべてリンパ節転移が無かった。②肉眼的胸膜浸潤，組織学的胸膜浸潤の有無（P≧2，p≧2）はリンパ節転移と関連があった。③組織学的なリンパ管侵襲の有無はリンパ節転移と関連があった。④ＣＥＡの値が高値になるほどリンパ節転移の陽性率が上昇した。ＣＥＡ 10ng／mℓ以上の17例では13例がリンパ節転移陽性で，他の４例中３例は遠隔転移があった。
結論：①最大腫瘍径 1.5 cm未満（13例），②最大腫瘍径 1.5 cm以上 2.0 cm未満，肺野型，P0（23例）の条件を満たす例はすべてリンパ節転移が無かった。③ＣＥＡ 10ng／mℓ以上（17例）の条件ではリンパ節転移，遠隔転移が高率であった。

## C-48 肺癌組織における線溶系因子の検討

浜松医科大学第２内科
○永山雅晴、佐藤篤彦、早川啓史

（目的）第32回の本総会で肺癌組織中のPlasminogen Activator(UK), Plasminogen Activator Inhibitors(PAI-1, PAI-2)の含有量を報告した。今回、癌進展に伴う各指標の動態、相互関係をより詳細に検討した。
（対象と方法）外科的切除の行なわれた肺癌組織40例（偏平上皮癌20、腺癌20）中のUK、PAI-1, PAI-2をEIAを用いて測定した。
（結果および考案）肺門、縦隔リンパ節転移の有無における各測定値を下記に示す。

| | UK | PAI-1 | PAI-2 |
|---|---|---|---|
| LN転移(-) | 5.76(0.86) | 4.11(0.97) | 11.20(2.56) |
| LN転移(+) | 6.08(2.65) | 3.19(0.49) | 5.98(1.05)* |

数字は平均値で( )内はSE　LN・リンパ節
単位は ng／mg protein　*p<0.05

LN転移(+)群においてPAI-2は有意に減少していた。またLN転移(-)群ではUKとPAI-2の間に正の有意相関（R＝0.534　p＜0.05）があったが、LN転移(+)群では認められなかった。UKとPAI-1の間には一定の相関はなかった。以上よりPAI-2とUKの相互関係が癌の進展にかかわっていることが示唆された。

NII-Electronic Library Service